史家の課題について

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト
泉井久之助譯

譯者小引　ここに譯出した論文はÜber die Aufgabe des Geschichtsschreibers と題せられ、フンボルトが比較的晩年言語の研究に愈〻專心した頃、プロシヤのアカデミーにおいて朗讀したものである。（一八二一年四月一二日。標題の Geschichtsschreiber は今ならばむしろ悪い意味（歴史書き、歴史屋）に取られさうな名辭であるが、この論文においては決してさうした意味合に用ゐられてゐないのは本文の示す如くである。ドクトル・ボーネルに訊けば當時まだヒストリカーといふ單語は用ゐられてなかつたといふ事である。兎に角今日のヒストリカーといふ語には單なる歴史的事件の編纂者といふ意味以上に、觀念論的な、或は超越的な、むしろ理想主義的な立場に立つて博大な史料の取扱中に世界の運命を看取することの出來る人を指してゐるやうである。ランプレヒトはヒストリカーであつても、ベリー（ピュアリー）は或はさうでないかも分らない。誠實な探査によつて集められた史料の整理の中に世界の運命の流れを認めることはフンボルトの所謂世界史的研究であり、その史家は正に世界史家である。フンボルトがここに Geschichtsschreiber と云ふのはこの世界史的見地に立つ史家に外ならない。

フンボルトが歴史を云爲するのは勿論歴史そのものの爲ではない。歴史を通じて深く人間の祕密を明らかにせんがためである。彼が深く――しかも廣く――言語を研究したのも窮極においてはこのためであり、藝術一般にわたり或は古典の林にわけ入つたのも偏にこの目標があつたからであつた。目標といふよりも彼自身も研究の喜びのあまり行動中は意識しなかつたところのインテレクテウエルな生得の傾向であつた。（從つて彼の文體も客觀的なbildenlなものよりも、むしろ主觀的なbestimmendなものである）。對象の中に常に人性の祕密を見出さんが爲には、對象の資料的研究の博大な集積を要するものの、更に重要なものは、對象の内奥に深く強く潜入するEinfühlungの力である。フンボルトの學問的態度が廣い意味で美學的と云はれるのはこの故である。これはフンボルトの最初から最後まで變らなかつた態度であつた。この態度それ自體を端的に表明した論文はここに譯述した「史家の課題について」に外ならない。從つてこの論文はフンボルトの全體を窺ふためには、小さいながらも重要な地位を要求するものである

事を忘れることは出來ない。

その美的透入の結果はどこに落ちつくか、この結果をフンボルトは種々な語で――しかもその度毎にニュアンスが少しづつ動くのが煩はしい事である――表はしてゐるが、要するに自然人生が始原的第一原理或は力に歸する事を云ひ、言語の作用の根本も、世界史の展開の原力も人間並に民族の精神の營みもすべてここに歸するといふのである。博大にして確實な資料を通つて、彼は結局問題を太源に導き、問題が解決し得ざる高みの圏内に入れる事を以て問題の究極の解決としてゐるのである。要するに今の我々からすれば大きい飛躍があるとせざるを得ないであらう。シュタインタールの言葉を借りて云へば、フンボルトの思想はカント的スピノーザ主義である。

この感は彼の論著の中でも最も有名な「人間言語の構造的種々性」に關する行論においても同じ事である。言語における多と一の問題は不思議に人の觸れない問題ではあるが、「言語哲學」においては最終最大の問題に相違ない（シュテンツェルの最近の什作「言語の哲學」もこの點については遺憾ながら非常に逃避的である）。フンボルトにおいても問題は結局太源に向つて飛躍して行く。有名な「言語はエルゴンでなくしてエネルゲイアである」といふ言葉のエネルゲイアも單に個人或は人間の精神作用である位にとつてゐては未だフンボルトの眞意を得たものと云ふことは出來ないであらう。必ず人生と自然の第一原理の Urkraft に出づるものである事をその下心として理解してゐなければならないと思はれる。要するに常識的に考へるならば、その行論或は論旨は我々には不滿である。しかし直接第一原理への關心と惱悦のとの連關の下に流れ出でるその言は我々をして深い省察に導かないでは置かないやうに思はれる、フンボルトの哲學はその體系において求めてはならないのである。如何なる考へも、之を徹底せしむれば最後の飛躍點に到達しないものはない。自然科學の問題と雖も同じである。しかしフンボルトにおける言語の一と多の問題は飛躍する前には今日ならば、盡すべき具體的の手段はなきにあらずとも思はれる。（殊に心理學には我々は最も百尺竿頭を期待してゐる。しかしカール・ビューラーの言語の方面に關する有名な研究も今のところこの方向に進んでゐないのである）。論理學も亦更に進歩を續けて最も隱微博大な例へば Brunstäd の所謂「神の側のロゴス」の如き事象の理解をすら我々に可能ならしめるであらう。しかし究極においてこの論文に見られるやうなフンボルト的態度はやはり離れる事は出來ないのであるまいかと思はれる。

私はこの論文をハイマン・シュタインタールの編纂にかゝる Die sprachphilosophischen Werke Wilhelm's von Humboldt, herausgegeben und erklärt von H. Steinthal. Berlin, 1884. から譯出した。プロシヤのアカデミー版の全集ではその第四卷にあり、外に Philosophische Bibliothek, Bd. 123 の Ausgewählte philosophische Schriften W. s von Humboldt, hrsgb. von Johannes Schubert にも收められ、レクラムでは Kleine Schriften(6922-6924) の中に

之を見出すことが出來る。私はテキストの異動は別に探して見なかつた。フンボルトの手稿を直接見てゐるシュタインタール編纂本に信頼したからである。（一九三四、八、四、后四）

史家の課題は出來事の叙述である。叙述が純粋且つ十全に行けば、課題の解決はそれだけ完全に行はれたことになる。純正な叙述は史家としての仕事における第一義的な嚴しい要求であると同時に、彼のなし得る最高の事柄である。この點より見れば、史家の仕事はただ認知し再現するのみであつて、自發的創造的ではないやうに思はれる。

しかしながら出來事は、知覺の世界に於いてはみづからのただ一部分をあらはすのみであつて、他の部分は却て我々の方から感知し推論し洞察してゆかなければならぬ。あらはれてゐる部分は散漫であり支離滅裂であつて相互の間に連絡がない。これらの裂片を統一し、それぞれをしてその眞の光の中に處らしめ、全體にその形態を與へるところのものは、曾て我々の直接的觀察に姿を現はしたことがない。我々が直接に觀察し得るところは、單に相互に相伴ひ相互に相繼起する事情のみであつて、その內面的始原的の連關それ自體ではない、しかも內的眞理は獨りこゝをのみその據るところとしてゐるのである。たとへ如何に些細な事件にせよ、それを物語らんとする際に、嚴密にただ現實に起つたことのみを云はんとすれば、その表現の選擇と調整とにあらゆる注意を拂ふにあらざれば、到るところにかの現象を超越した微細な限定が紛れ込み、誤謬或は杜撰はそこに胚胎することは、直に認め得られることである。勿論言語自體にもその責任がある、元來心情の極度の充滿から溢れ出る言語は、あらゆる副次概念から解放された表現を缺いてゐる事も多いからである。世に文字通り眞なる物語りほど稀なるはなく、從つて世にこれほど健全にして良く秩序せられ純粋な

判別力を有する頭腦と、自由にして客觀的な心境との證跡となるものはない、歴史的眞理が、遠くはなれてはじめてその姿が認められる雲に或る程度まで似通ふ所以であるのみならず、歴史上の事實はその相互に連絡なく未だ解決を經ない事情の下にあつては、それぞれ自體において最も矛盾が少く全體との關連にも最もよく適合する故に世間において眞理と認められてゐる傳說や穿鑿の結果と、價値において殆んど撰ぶところがない所以である。

現實の出來事をたとへ純粹に抽出する事が出來たとしても、それだけではいまだ事件の結構を把握する事は出來ない。これによつて得られるところは、歴史の缺くべからざる基底であり、素材ではあるが、しかし歴史そのものではない。ここに止まることは、結局、外的な直譯的な假現的な眞理のために、原本的であり、始原的の連關に根ざ

す眞理を犧牲に供し、更に可能的にすぎない錯誤の危險を避けんが爲に却つて確實な錯誤に陷らんとすることであると云ふことも出來よう。あらゆる出來事の眞理は上に述べたやうな見る事の出來ない事實の半面がなければ成立し得ない、この半面を史家は附け加へなければならぬ。この見地に立つとき、史家はただに自發的であるのみならず、また創造的である、勿論事實存在しないものを持ち出すことによつてではなく、現實にそれが如何にあるかを單なる感性以上のものを以て認識し得たところのものを自己の力を以て構成することによつて。種々な方法によつて、しかし詩人の如き態度を以て、彼は支離滅裂に取り集められたものを自己の中において一個の全體にまで造りあげなければならぬ。

勿論、史家と詩人の二領域をたゞ一點において雖も觸接せしめることは、如何にも危險に見え

るであらう。しかし兩者の働き方には明白に相通ふものがある。例へば、史家は、上述の如く出來事の叙述において、その眞理に到達するのは、偏に直接的の觀察によつて得られた不充分なもの斷片的なものを補足し結合することによつてであるとすれば、彼は正に詩人の如く偏に想像力によつてこれをなし得るのみである。ただし彼は想像力を現實の經驗と探鑿の下位に置くところに、詩人との區別があり、これによつて彼はあらゆる危險を揚棄することが出來る。想像力はかくの如く下位におかれた狀態にあつては、純粹の想像力として作用しない、從つてより正しい名を以て豫覺力或は統合力と呼び得る。しかしかうすることは歴史だけにあまりに低い立場を與へることになるのではあるまいか。出來事の眞理は如何にも單一である、しかし我々の考へ得る中に就いて最高のものである。何となればそれが全然的に把握せられたとき一の必然的鐵鎖としてあらゆる現實を規定するところのものが遂にその中に露呈するに至るからである。歴史家は從つてこの必然的なるものを追求しなければならぬ、決して詩人の如く素材を必然性の形式の支配下に置いてはならない、却て必然性を律するところのかの理念を正しく精神内に把握してゐなければならぬ、彼はこの理念に貫かれてのみ、現實的なるものを現實の中に探究するに際して、その(理念の、或は必然性の)痕跡を發見することが出來るからである。

史家は地上の營みのあらゆる糸と天上の理念のあらゆる刻印を包藏する、言葉を換へて云へば現存在の總體が、遠かれ近かれ、彼の工作の對象であり、從つて彼はまた精神のとるあらゆる方向に向つて追隨しなければならぬ。思索と經驗と詩作は決して相互に無關係な相對立し相限定する精神作用ではなく、同じ精神作用の相異なる照面にす

ぎない。

故に史家は同時に二つの道を取らねばならぬ、史的眞理に接近し出來事を精確無私に且つ批判的に探鑿すると同時に、探究の結果を綜合し前の手段によつて到達し得られなかつたもの(理念)を感取しなければならぬ。二つの中の第一の道のみを踏めば眞理の本質を見謬まるであらう、反對に第一を措いて第二の道を進んだものには、不知の間に個々の事件に眞理を慣入せんとするに至る。素朴的な自然描寫と雖も單なる部分の列擧錄記、面や角の測定を以て能事畢るとなすことは出來ない全體の上には生々躍動する息吹がある、全體の中からはその內的の性格が我々に話しかける、これらは何れも測定することも出來ねば、また單に描寫することも出來ない。從つて自然描寫も亦おのづから第二の手段に歸つて來なければならぬ、而して自然描寫にとつて第二の道とは自然物體の一般的及び個別的現存在形式の表象に外ならない。

歷史においてもかの第二の道に於いては何ら個々の事柄の發見があるわけではなく、殊に何ら餘分の附會があるべきではない。精神はただ、すべての生起しつゝあるものゝ形式を把握することによつて、現實に探究の對象とし得べき素材を更に良く理解し、更に認識を深く進め、單なる悟性の作用がなし得る以上に出でる必要がある。探究する力と探究せられる對象との間のこの相互同化こそすべての問題の歸するところである。史家がその天賦と研究によつて人性とその營みを理解することが深いだけ、或は先天後天的に彼に人間的な傾向が強く培はれてゐるだけ、而して又彼が自らの人間性を純粹に活動せしめ得るだけ、彼の仕事の課題はそれだけ十全な解決が得られる。この事を證明してゐるのは年代記である。そこには歪曲せられた事實も多く、明白なお伽話も一つに止まらない

にも拘らず、年代記のよきものには最も純粋な歴史的眞理を期待し得べき基質がある事を拒否することが出來ない。所謂覺え書(メモワール)の中の古いものも亦歴史的眞理に連關がある。こゝでは事はあまりに個人と密接に關係するあまりに、たとへ個々の點を取扱ふ際にも、歴史が要求するところの人性に對する一般的な關係が犧牲に供せられてはゐるけれども。

歴史は、あらゆる他の學問的な仕事がすべてさうであるやうに、多くの下位目的に盡すところがある以外は、その仕事は正に哲學や詩作と同じく一の自由な、それ自らにおいて完結せる藝術である。犇き合ふ世上事件の雄大な雜踏——或は地球の性質、人性の自然、民族と個人の性格に由來し、或は宛も無から湧き出でたるが如く、宛も超自然に育まれたるが如く、茫漠と豫感し得られる力に依存しつゝ、深く人間の心に根を下ろす永遠の理念に明々に支配を受けつつある——は、精神が決して「一個の形式」中に齎し得ざる一の無限なるものであり、しかも精神を唆しつつ敢てそれを試まし め、部分的にはそれに成功せしめる强さを與へるものである。哲學が事物の第一根據を、藝術が美の理想を追求するが如く、歴史の追ひ求めるものは、個性の見解感情要求を滅却したる狀態において對象に向けられた心情が感得したところの、誠實なる眞理と躍動的な充實と純粋な明晰さの中における、人間運命の姿である。かかる心境を現出せしめ或は養成することこそ史家の最終目的でなければならぬ。(しかし彼がこれに到達し得るは、偏に彼がその最近の目的——出來事の純一な叙述——を良心的な誠實さを以て追隨し得たときである事を忘れてはならない。)

何となれば、現實に對する識は史家が自ら喚び起し生命を賦與すべきものだからであり、史家の

仕事は主觀的にはこの概念の發展を以て、客觀的には叙述に上る概念を以つて書表はすことが出來るからである。全人格に影響を及ぼすやうな精神的努力にはすべてその努力の要素、作用する力、精神に及ぼす影響の祕蹟とも稱せられ得べき何物かがあり、精神的努力によつてその圈内に取り入れられる對象とは明白にそれは別個のものであつて、對象はただこの何物かを新しい別の方法の下に心情の前に齎すに役立ち得るに過ぎない事も多い。數學においては數と線の絶對化がこれであり、形而上學においてはあらゆる經驗からの遊離であり、藝術における自然の奇蹟的な取扱ひであつて、藝術に於てはすべてが自然から取材された如くに見えながら一つとして自然の中にはこれと同樣な存在の仕方が見出されないのである。歴史の動きをその中に抱藏する要素は、現實に對する識であり、ここに時間における現存在の浮動性の感じと、先行因と後續因の相互關係の感じがあり、同時に内面的精神自由があり、現實は、その外觀的の偶然性にも拘らず、内的必然性によつて拘束せられてゐるとの理性的認識の根ざすところもそこである。たとへただ一個の人間生活を精神の中で通觀するのみであつても、我々はそこにあらはれる種々の契機――これらの契機を通じて歴史は人を刺戟し拘束する――に心を打たれるばかりである、歴史家はその仕事の課題を解くためには、現實それ自體と全く同樣に心情を動かし得るやうに事件を綜合しなければならない。

この點において歴史は行動的生活と相通ふものである。歴史が我々に役立つのは、それが追隨すべき、或は戒慎すべきものゝ個々の例を我々に齎すことによつてではむしろなからうと思はれる、これらは人を謬りに導く事が多く、人を教へる事は蓋し稀である。その眞の、しかも無限の效用は、

事件そのものよりも寧ろ事件に附添せる形式によつて、現實取扱ひの識を鼓舞し純化する事であり、識が單なる理念の領域内に漂蕩し去る事を防ぐと共に、しかもそれを理念によつて支配する事であるのみならず、この狹い中庸の道に立つて、明視を以て常に支配的理念方向の中に眞なるものを認識し、確固たる識を以てこれに據るより外に、事件の紛亂を效果的に攻究する手段のない事を、心情に常に意識せしめることである。

その對象の如何を問はず、またその物語るところが事件の連關的組織であるか、單に個々の事件であるかを問はず、歷史は常にかゝる内的の效果を齎さなければならない。眞に史家の名に値する史家は、あらゆる個々の事件を全體の一部分として、或は――要するに同じ事ではあるが――あらゆる個々の事件において歷史的形式一般を共に叙述しなければならない。

ここにおいて史家に要求されるところの叙述なるものの概念を更に精細に發展せしめることが出來る。事件の織物は、ただ時間的地理的に判別せられたのみの一見如何にも紛亂した狀態において史家の前に横はる。史家は必然的なるものを偶然的なるものから分ち、内的統一を發見し、眞に作用しつつある力を露呈せしめて、事件の幻想的とも云ふべき卽ち無用の哲學的價値或は詩的魅力に非ずして事件の第一義的にして本質的の要請、卽ち眞理と誠實さとを荷ふ姿態を、彼の叙述に與へなければならない。何となれば皮相的現象において見るときは、事件をただ半面、或は歪曲せられた姿において認識し得るにすぎないのみならず、一般の觀察者はその際あらゆる瞬間に於て迷蒙と誤謬とを混入せしめるからである。これらは眞の形態を把握してゐることによつてのみ除去する事が出來るのであるが、かかる形態は先天的に惠ま

れ、研究と修練によつて研ぎすまされた史家の眼識に對してはじめて自らを明らかにするにすぎない。然らばこの眞に惠まれてあるためには、史家は如何にして事をはじめるべきであるか。

歴史的叙述は、藝術のそれと等しく、自然の模倣である。兩者の根柢は眞なる形態の認識であり、必然的なるものの發見であり、偶然的なるものの除去である。從つて我々がより容易に認識し得られる藝術家の行爲を、より多くの疑問の下に置かれてゐる史家の行爲に應用することは當然とせなければならぬ。

有機的形態の模倣は二重の道に依つてなし得られる。眼と手の力の及ぶかぎり精確に外的輪廓を直接模造する事によるか、或は外的輪廓は如何にして全體の概念と形式から發生するかを豫め研究することにより、また輪廓の關係を抽象することにより、また藝術的な眼とは異なる見方において姿態を先づ觀察せしめ、次にその中には單なる自然との文字通りの一致以上に今一つより高き眞理が含まれてゐる如くに想像力によつて姿態を再現すべき働きによるかである。何となれば、藝術作品の最大の德は、現實的現象の中に明瞭ならざる形態の內的眞理を明瞭ならしめる事にあるからである。今述べたこの兩方の道は、あらゆる時と種類を通じて謬らない眞僞の藝術の區別である。時と場所において非常に相距つてはゐるが、共に我々に取つては藝術の始發點を示してゐる二つの民族、エヂプト人とメキシコ人においてはこの區別は非常に明瞭にあらはれてゐる。今までにも兩者の類似は少からず指示されてゐるのは尤もなことである、彼らは何れも繪を文字として使用するといふ藝術上の怖るべき懸涯を超越しなければならなかつたのであるが、メキシコ人の場合には一つとして正しい姿の見解を示す文字は見出すこと

が出來ないに反して、エヂプト人にあつてはその聖用文字の中にスタイルがある。當然の事。メキシコ人の繪には內的形式を感取し有機的構造を認識した痕跡が殆んど一つとしてなくすべては外的形態の模倣に向つてゐる。ところが未完成の藝術において單なる外的輪廓のみを追隨せんと試みは全然失敗に歸し結局一の戲畫に終ることは當然であり、これに反して(エヂプト人が)均衡と平衡を求めんとした努力は彼らの手腕と道具が不充分なるにも拘らず明らかに看取することが出來る。

形態の輪廓を內から理解せんとするならば、常に形式一般と組織體の本質に、卽ち數學と自然學(Naturkunde)に歸趨せなければならぬ。後者は形態の概念を、前者は理念を與へてくれる。この二つには更に綜合的第三者として靈魂の、精神的生命の表現が加らねばならぬ。しかし部分の均勢、關係の平衡の中にあらはれる純粹形式は、新鮮な若き精神には寧ろ純粹科學が魅力があり、事實また樣々の準備を必要とする經驗科學よりも修められ易いところより見て、最も本質的な、最も始原的なものとしなければならぬ。この事はエヂプトとギリシヤの彫刻において明らかである。双方において第一に眼を打つものは生硬をも殆んどものとしない形式の純粹性と嚴重さであり、圓と半圓の規則性、角の鋭さ、線の的確さであり、この確實な基礎の上に爾餘の外的輪廓は成立してゐる。たとへ有機的組織についての一層精密な智識がかけてゐる場合にも、右の事だけは輝くばかり鮮かにあらはれてゐる、そして藝術家が已に右の缺けたるところに充分の智識を補つて、流麗な優美さを賦與し神の如き表現を吹き込む腕が出來たときにも、もし彼に全然「かのもの」に對する顧慮がなかつたとすれば、彼はその腕を揮つて人の心を打たうなどの考は決して浮んで來なかつたであらう。

絶對者は彼にはやはり第一義的にして最高のものであつたのである。

從つて藝術家が幻想に沈潛する際にも、純粹形式に對する感激的な愛がなかつたならば、たとへ人生に如何なる複雜さがあり如何なる美があつても、彼には何ら役立つところはないであらう。これを思へば、その生活は最も柔軟優美ではなく、美の點において特に優れてゐると云ふ事は出來ないけれども、その深い感性は早くから數學力學に向ひ、壯大な非常に單一な、しかし嚴密に規則的な建築に趣味を見出し、この釣合の建築學をまた人體の模倣にも應用して剛體の材料に對して線の第一義を爭ひ合つた〔エヂプト人の如き〕民族においてこそ、藝術が發動した所以も理解し得られるのである。ギリシヤ人の環境はすべてにおいて特異なものがあつた、――そこには人の心を打つ美、豐かに躍動する時としては放逸にもわたる生活、複雜豐饒な神話、これらが彼らを包むものであつたのみならず、彼らの揮ふ鑿は柔い大理石から、否最も古い時代には木材から容易に好むところの姿を彫り出すことが出來たのである。それだけに我々は彼らの藝術意識の深みと眞劍さを驚嘆しなければならないと思はれる――彼らはこれらにおける皮相な優美へのすべての誘惑にも拘らず、エヂプト的嚴正さを有機的構造に對する一層根本的な智識によつて更に高める事さへ出來たからである。

かくの如く藝術の基礎として獨り生活の豐饒さのみならず、同時にまた乾燥な數學的觀照をも擧げることは、一見如何にも奇異な感を抱かせるであらう。しかし眞理はこの故に減ずるものではない、藝術家は冷酷に支配する理念を自由な遊戯の現象中に盛る任務があつてこそ、天才の高躍する力も彼に取つて意義がある。數學的眞理、時空の永遠の關係の單なる觀照の中にもやはり無限の魅力

がある、音調、數理、線條にもそれがあらはれる。これらの觀察には、それ自らにおいて、常に新たなる關係、常に完全に解かれてゆく問題中に見出される永遠に新たな滿足がある。我々において、形式の美の感情が弱められてゐるのは、純粹科學をあまりに早く、あまりに多方面に應用し盡すからである。

卽ち藝術家の模倣は理念から出發しなければならぬ、而して形態の眞理は理念を通じてのみ彼にあらはれる。歷史の場合において模倣すべきものは同じく自然に外ならないのであるから、歷史についても同じ事が云はなければならない、問題はただ、史家を嚮導し得べき理念はありやなしや、もしありとすれば如何なる理念であるかである。

しかしこの議論を更に進めるには、一言理念の言及が已に史的誠實性の純粹さを損はしめるに至らないやうに、常に要愼をする必要がある。藝術家と史家は共に叙述的であり模倣的であるとは云ふものの、その目標は全然異るからである。藝術家はすべての現實から身を退くために、現實の無常な現象を掠り去り、輕く現實に觸れるのみであるが、史家の求めるところはただ現實であり、彼はその中へ透入してゆかなければならぬ。しかし正にこの故に、而もまた彼が個々のものの不徹底な外的關係には滿足することが出來ず、必ず眞の結鎖を看取し傳べき中心點にまで到達しなければならないが故に、史家は事件の眞理を求めるのに、宛も藝術家が形態の眞理を求めるに等しい道を踏まなければならないのである。歷史的事件は感覺的世界の事件に比して、純粹に讀み取る事が出來る程に明瞭にあらはれる事は感覺世界の事件に比して非常に少ない。その理解は事件の性質と觀察者の識との合一においてはじめて得られるものであつて、藝術の場合と同じく、すべてを悟性の働

きによつて順次論理的に導き出し概念に分析することが出來ないものであつて、史家が正當なもの、纖細なもの、隱微なものを把握し得るやうに豫め正しく定位せられてゐるからに外ならない。もし史家が事件の個々の事情を、しかもそれらが外見上眼に見える通りに並列的に描き出すのみであつて、自ら嚴密にそれらの內面的關係を明らかにせず、營みつつある力を悟らず、その瞬間において取りつつある事件の方向を認識することなく、またその時の狀態と先行する諸變化との相互連關を究めないとすれば、彼の描くところは、かゝる場合の畫家と同じく、單に一幅の戲畫にすぎない。これを避けんがためには史家はこれらの諸種の力の性質、營み、相關々係を熟知し、特殊なるものを完全に尋究するには常に特殊を包藏するところの一般者の智識を豫想しなければならないことを辨へる必要がある。この意味において出來事の把握は常に理念の嚮導の下になければならぬ。

しかし、これらの理念は無數の事件そのものから湧き出づるべきもの、卽ち純粹に歷史的な意味の下に企圖せられた事件の觀察を通じて精神內に顯現し來るべきものであつて、決して歷史に對し無緣の添物の如くに賞與せらるべきものであつてはならない事はおのづから明らかである。かくの如き過ちに容易に陷り易いのは所謂哲學的歷史であつて、一般に史的誠實性を脅かすものは、むしろ哲學的取扱から來る危險であり、詩人的取扱には遙かにその憂は少ない。後者は習慣として、少なくとも素材に自由を與へてゐるからである。哲學は事件に對して一定の目標を措定する、かかる先入の下に、究極原因を探究せんとすれば、たとへ人間の本質、或は自然自體から之を導き出さうとするにもせよ、諸力の獨特の營みの有樣を自由に觀察する事を妨げ歪曲するに至ることは必定である。

また個人は常にその果敢ない現存在の短い時間の中にその生活の頂點〔最期〕を見出さなければならず、從つて目的的な歴史は事象の窮極目的を生命あるものの中に定立することが不可能であり、云はば生命なき制度及び一の理想的全體の概念の中にそれを求めることになる點から云つても、目的的歴史は決して世界運命の生命ある眞理に到達する事は出來ない（――例へば地表において次第に一般化する開墾と植民の中に、諸民族において次第に、增高する文化の中に、すべての人々の更に緊密な結合において、市民社會の完全性の狀態への窮極における到達の中に、或はその他何れかこの種の理念等の生命なき制度理想的全體の中に究極目的を見出さんとして）。如何にも個人個人の活動と福祉は直接にこれらすべてに依存してゐる、しかし各世代が以前のすべての世代を通じ獲得せられたものとして受けてゐる制度は決して新い世代の力の證據ではなく、また決してその力を絶えず活動せしめる素材でもないのである。何となれば、精神と性向の結實であるところの科學、藝術、道德的制度も、精神によつて常に新しく生命を賦與せられない限り、直にその精神性を失ひ、物質に歸してしまふ。これらすべての物は、ただ考へられる事によつて維持せられ得る、かの思想の性質を帶びてゐるものである。

故に史家が注意を拂はなければならないのは作用し創造しつつある力である。ここに史家獨自の境地がある。史家が世界史上ラビリントの如くに錯綜した事件を考察し、之に自らの深い感銘から出發して事件の眞の連關を明らかならしめる如き形式を與へるためになし得る事は、事件そのものの中よりこの形式を引き出すことの外にはない。一見ここに横はると思はれる矛盾も更に詳しく觀察すれば消滅してしまふ。すべて一つのものの把

握は、その可能なるがための條件として、已に把握の中に後來現實に把握さるべきものの相似體を豫想してゐる――主觀と客觀の間における先行的始原的な一致である。把握は決して主觀からの單純な發展でもなければ、また決して客觀からの單純な抽出でもなく、同時にその兩方である。把握は常に、以前より存在する一般者を新しい特殊者に適用することの中に成立するからである。二つの本質の間に絶對的な罅隙が横はるときは、相互の間に理解をかけ渡すべき橋がない筈である。故に理解することは已に對者の識において理解してゐることでなければならぬ。歴史にあつてはこの把握に關する先行的素地は非常に明瞭である、世界史において脈々として働いてゐるもののすべては、已に人間の內部にあつてもまた活動してゐるからである。從つて一の民族の心情があらゆる人間的なるものを感受する程度が深いのみならず、またそれによつて受ける感銘が柔軟であり多面的であり純粹であるだけ、その民族は語の眞の意味における史家を有する素質が高いわけである。かかる素質の上になほ檢討的實踐が附け加はらなければならない。實踐によつて我々は豫め感得したところのものを對象において是を正しつつ探査し、この二つの相互作用を繰り返すことによつて事件に對する明瞭さと同時に確信を浮び上らせるまでに至ることが出來る。

かかる方法によつて、史家は世界史の創造的諸力の研究を通じて、あらゆる事件の連關形式に關する一般圖を企圖するのであり、この圈內に上に述べた如き理念が存在する。理念は歴史の中へ運び込まれるものではなくして歴史の本質自體を構成するものである。何となれば、死力にせよ、活力にせよ、あらゆる力はそのものの自然の法則に從つて作用するものであり、生起するもののすべ

ては時間と空間原理の下に離るべからざる聯關においてあるからである。

この連關中においては歴史は、如何に複雜且つ生動的に吾人の目前に動くにせよ、要するに宛も一個の死せる、不變の法則に服從せる、而して器械的の諸力によつて動かされる時計仕掛としてあらはれる。何となればこの場合、一の事件は他のそれを生み、あらゆる作用の程度と性質はその原因によつて與へられるものであるのみならず、自由と思はれる人間の意思と雖も結局遠くその人間の生誕以前、否、その民族の生成以前より連綿として用意されて來た周圍の事情によつて決定せられるものだからである。個々の任意の一時點より過去若しくは未來の全系列を總算することが不可能なのも、それ自體に原因があるのではなく、單に一群の中間要素の充分なる智識を吾々が有し得ないからにすぎないと思はれる。しかしなが上にも屢々我々が認めた如く、かかる見方を徹底的に追隨する事は却つて、眞に創造しつつある諸力の洞見を妨げる所以であり、生命的なるものが作用する際主要要素は常に考量の外に逃れ去るものであるのみならず、かの一見如何にも器械的と思はれる運命もやはり始發に於ては自由に作用しつつある脈動に服屬することを忘れしめるものである。

故に、一の事件を他の事件によつて器械的に決定する外に、むしろ諸力の個有的な本質に注意を向けなければならない、ここに於て第一に問題となるのは諸力の生理的作用である。あらゆる生命的なる諸力——人にせよ植物にせよ、民族にせよ、個人にせよ、人類にせよ、個々の民族にせよ、のみならず、また一定の順序において繼續せられる作用の上に成立する精神の所產、例へば文學、藝術、道德、市民社會の外形の如きにせよ——何れもその有する性質、發展、法則は共通である。頂點へ

の段階的到達、それからの漸次的沒落、或種の完全狀態から或種の變敗への移行等々もまた同じ。ここに一群の歷史上の事件に對する說明が得られる事は否む事が出來ない、が決してこれによつて創造的原理は認識せられるものではなく、この原理を體現してそれを向上せしめ飛躍せしめる手段とならない場合、史家をして原理の發見に全く手を束ねしめる單に一個の形式があらはれるにすぎないことは明らかである。

またその進行中において更に賴みにする事が出來ず、且つその明瞭な法則に從つてといふよりはむしろ或種の類推(形式)の中に入れて把握出來るにすぎないものは、相互に複雜に錯綜してゐる人間の能力、感情、傾向及び熱情の如き心理的な諸力である。これらは、行動に對する最近の動機として、その結果に對する最直接的な原因として、殊に歷史家を煩はすものであり、また最も事件の說明に利用せられることが多いものである。しかしこの考へこそ我々が最も戒愼しなければならないものであつて、これらは最も非世界史的であり、世界史てふ悲壯劇を一片の日常劇に引き下げ、あまりに容易に我々を誘つて、個々の事件を全體との連關より引き離し、世界運命に易へるに個人的動機の蠢動を以てするものはこの種の考へ方である。すべてはこの見方に從へば個人の中に移され、しかもその個人は個人の統一と深さ、その本來の本質において認識せられてゐるのではないのである。何となれば個人の本質はかくの如くに分割し、分析し、多數の人々から取られて多數の人々に一樣に適用せられることになつてゐる經驗によつて批判することが出來ないものであるから。個人の個有の力は內的にあらゆる人間的感情と苦惱を貫流し、しかも外的にすべてに對して自らの極印と性格を押捺してゐるものである。

この三つのことに示された見地〔器械的、生理的、心理的〕によつて一應史家を分類する事も出來るであらう、しかし眞に史家の性格は、その何れによつても、否、三つすべてを通じても整理し盡すことは出來ない。何となれば、これら見地自體が事件の連關の原因を盡してゐるものではなく、事件をその眞理において理解するための唯一の道たる根本觀念なるものがこれらの見地の圈外にあるからである。これらの把握するところは規則的に再現せられる世界において見渡すことが出來る死物的生命的及び精神的性質の現象のみであつて、本源的な脈動ではない。これらの現象は從つて、規則的に、知られたる法則或は確實な經驗通りに再歸して來る發展についての說明を與へるにすぎない。如何なる、のみならず如何にして一の驚異が起るか——それに對して器械的生理的心理的の說明を添加する事は出來るが、これらの說明の何れもその起原を明らめる事が出來ないとすれば——その解決はかの三つの圈內にあつてはただに說明出來ないのみならず、また全く知られざるままに止まるであらう。

如何なる方法を取るにもせよ、現象の領域はその領域以外の一點に立つてはじめて把握する事が出來る、しかも愼重にこの圈を拔け出す事は、その圈內に盲目的に閉ぢ籠る事が必定的に迷妄であるのと同じ程度に、安全である。世界史は世界支配〔理念の支配〕なくしては理解する事が出來ない。

この視點を堅持すれば、事件の理解は自然の圈內から得られた說明を以て決して完結するものではないことを知る大いなる利益を立ち所に得ることが出來る。とは云ふものの、これを以て直ちに史家の進路における最後的の最も困難なしかも最とも重要な部分があまり輕減されるものでないの

は云ふまでもない。元々史家は世界支配の意圖を直接的に尋求する器官を與へられてはゐないのみならず、もしそれを尋求せんとすれば、はじめから究極原因を搜求める場合と同じく、ただ邪道へそれてゆくばかりであらう。しかし自然の發展の外に存在する事件の指導原理は、それ自身現象ではないけれども、しかもこれらの現對象に存し、それらにおいて非物體的の本質として認識せられるけれども、我々が現象の世界を離れ却つて現象の由來するところの本源の中へ精神的に移入しない限り決して認知し得られない媒體を通じて正に事件自體の上にあらはれる。かうしてこの指導原理を尋求することに史家の課題の答解の最終條件が結びついてゐるのである。

歴史において創造的に働く諸力の數は、直接事件の上にあらはれてゐる諸力を以て盡きるものではない。たとへ史家が一個一個に或はその結合において これらの諸力を——例へば地表の姿とその變形、氣候の變化、民族の精神能力とその心的傾向、個々人の中により特色的にあらはれるその能力や傾向、藝術や學問の影響、社會制度の深刻にして廣汎な影響を——徹底的に探究してもなほそこには更に有力に働きながら直接我々の眼には見えず、而も右の諸力自體に始動と方向を與へる一の原理——言ひ換ふればその性質上有限性の圏外に立つてはゐるが世界史をそのすべての部分において左右し支配してゐる諸理念がなほ殘存してゐるのである。

かかる理念が自らを啓示する事、又單なる自然法則的營みによつては說明することの出來ない或種の現象が、ただかかる理念の息吹に自らの現存在を負ふてゐる事、これらは一點の疑ひもない事實であり、史家が事件の眞の姿を認識するためには必ず事件以外の境に身を置かなければならない

一點が散在するのは明らかな事實である。

理念が自らをあらはすには二つの道がある。一つは方向として、この方向ははじめはさだかではないけれども次第に明らかに、遂には確實不動のものとして多くの人々をあらゆる場所においてあらゆる事情の下に補捉せざればやまない。二つには始動作用として。この作用はその範圍と崇高さにおいて附隨的事情とはおのづから全く別のものである。

第一については容易に例を擧げる事が出來る、あらゆる時點においてこの例が明らかでなかつたことはない。しかし我々が今むしろ物質的器械的に說明してゐる事件も、この見方を以て見なければならないものがなほ多數に存在する事は殆んど疑のないところであらう。

始動作用、卽ち周圍の事情を以ては決して說明し盡すことの出來ない現象の例は、上に述べた如きエヂプトにおける純粹形式の藝術の發生であり、或は更にギリシャおける自由にしてしかも相互に埒を超えざる個人性の突然的出現であらう。ギリシャにおいては個人性と共に言語・詩・藝術は忽ちにして完成した姿においてあらはれたものであつて、我々は如何程努めてもそれまでに至る漸次的な道程を明らかにする事が出來ないのである。ギリシャ文化の最も驚嘆すべきものと私が常に考へてゐることは（そしてここに彼らの文化を理解すべき鍵の最も多くがあるのであるが）、ギリシャ人が加工した偉大なるものは元々すべて、階級に分たれてゐた〔他の〕民族から得て來たものであり、彼ら自らはかの階級の區別の桎梏を免れてはゐたがしかしその伟は、例へば學派若しくは自由結社の如きゆるやかなものに置きかへられた中に殘されてゐたことであり、一面他に類例のない程彼らの固有民族的精神の細かい分裂によつて種

族となり部族となり個々の國家と分れたのであつたが再びそれらを漸高的に結合しつつ、個性の多樣性を最も活潑な相關作用にまで齎した事である。ギリシヤはかうして前後未だ存在したことのない民族的個性の理念を樹立し、宛も個性の中にあらゆる現存在の祕密があると同樣に、個性の相互作用の自由と特質の進むに應じて人類の世界史的進歩があるとするのである。

勿論理念はただ自然的結合中に顯現することもある。故に自然現象においても若干の始動的原因、不完全より完全への移行、を我々の智識に巨多の缺陷あるにもかゝはらずなほこれをそれと措定することも出來る。とは云へ神祕はやはり始原的方向を認めることの中に、最初の閃きを窺ひ得ることの中に把握せらるべきものである事に變りはあり得ない、この閃きがあつてはじめて始動的事情の作用があり、これなくしてはたとへ數世紀を通じて練習を重ね徐々に前進が計られても決して目標に到達することはあり得ない。理念が自らを委託するのはただ精神的に個性的な力のみである、しかし理念がこの力の中に委した芽はその本性に從つて發展し、たとへ他の個人の中に移行した場合にあつてもその發展の仕方は依然として同一であり、この芽から出でた植物は自らによつて花をつけ成熟し次いで凋れて消え去つてしまふこと、宛も情勢や個人の姿の如くであることは、現象中にこの走程を完成するのが理念の自立的性質であることを示すものである。かくの如くにして、無限なるものの何かの一面を寫す姿があらゆる種類の現存在と精神的創造の中に現實化せられるのであり、その姿が人生に干與する事によつて新しい現象が惹起せられるのである。

物質世界にあつては（精神世界を探究する際にもこの世界に類推を求めつつゆくのが常に誤差を

除く道ではあるが)、精神世界における如く著しく新しい姿の生起を期待する事は出來ない。有機體の多樣性は已にそれぞれの一定の形を取つてゐる。有機的な諸個體の中にこの多樣性は盡されるのではなく、個體の間にもなほ微細な相異があるけれども、かゝる相異は直接的に我々に分らないし、殊に精神的構造に對するその影響は殆んど識別出來ない位である。物質世界の創造は空間において一時に、精神世界のそれは徐々に時間の中にあらはれる。卽ち前者にあつては創造作用は單調な生成の繼續に化する靜點が與へられてゐると云ふことが出來る。姿態と身體的構造よりも有機的生命は遙かに精神的なるものに對して近い。精神と生命の法則は何れにも相互に適用することが出來る。健康な始原力が働く場合この事はあまり明瞭ではない。勿論この場合にもかくれたる原因に隨つて連關と方向との變化は起り時期的に有機的生命を他の方へ他の方へと規定してゆく事は否むことが出來ないけれども。しかし變調的な生命狀態、卽ち病的形式においては、〔精神における如く〕はつきりした原因もなしに、突如として或は徐々に起り、自らの法則に從ふ如くに見え、而もかくれたる事物の關係があることを示唆する如き方向に似たるものがあることは否む事が出來ない。このことは度々の觀察によつて明らかである、これを歷史の上に利用する事は多分ずつと後にならなければ出來ないであらうけれども。

すべて人間的個體は現象に根ざす理念である、そして數人の人々にあつてはこの理念は非常に明らかに輝き出でて、如何にも理念が自らを啓示するために個人の形を取つたかと思はれる事がある。人間の營みを展開する時、この營みそれ自體を規定してゐる原因をすべて控除したあとに、何ものか或る原本的なものがその中に殘存するのを

發見するであらう。それは原因のために抹殺し去られるどころか、むしろそれを變形せしめるものであり、この要素の中にこそ、その內面的本來的な自然に外的現存在を賦與する不斷に活動せる努力がある。このことは個人個人におけると個體としての民族におけると同一であり、民族の歷史の多くの部分においてはそれを明らかに見ることが出來る。人間は或る時期、或る事情の下にあつては群として發展するものだからである。從つて諸民族において必要や苦惱や表面的の偶然によつて導かれてゆく事件の眞中にも、個性の精神的原理がかの苦惱や偶然や必然よりも有力に働いてゐるのであり、原理は內在する理念をして自由に發現せしめんことを求めて、しかもそれに成功してゐる、宛も最も纖細な植物がその脈管を膨脹せしめて數百年の間何ものにも抗し續けて來た城壁を破壞する如くに。民族と個人がそれぞれの行爲を通じて人類に賦與する方向の外に、彼らはまた、單なる事件や出來事よりも永續的にして影響の著しい精神的個性の諸形式を後に殘して行くのである。

しかしまだその外に理想的形式なるものがある。人間的個性それ自體ではなく、單に間接的にこれと關係するのみのものである。言語はこの形式に屬してゐる。何となれば、民族の精神がその言語に映じてゐるに拘らず、それぞれの言語はまたその以前からの、むしろ獨立的な基質を持ち、言語自體の本質、言語自體の內的體系が有力にして規定的である事は、その自立性は他の影響を受けるよりもむしろ他に影響を與へるものであるのみならず、すべての優れた言語は理念の生產と傳達の獨自の形式としてあらはれてゐる程である。

より純粹より完全な仕方を以て、永遠の始原理念は、考へ得られるところのあらゆるものに、その現存在と妥當とを賦與する——すべての身體的

並に精神的形態においては美を、すべての力がその内在する法則に從つて行ふ不變の營みにおいては眞理を、相互永遠に相是正し相罰する事件の假借するところのない進行においては法を。

故に世界統治の大意圖を直接に窺ふ事は出來ず、單にそれを宿す理念において推知し得るに止まる人間の眼に取つては、各々の歴史は卽ち一つの理念の實現であり、理念の中に同時に力と目標が横はる。從つて我々はひたすら創造的に働く諸力の觀察に沒入する事によつて、邪道に陷ることなくして精神の當然捜し求める究極原因に到着することが出來る。歴史の目標は人類を通じて表現さるべき理念を、有限的な形式が理念と合一し得べきあらゆる方面とあらゆる形態の下において、實現する事の外にはあり得ない。そして事件の流がおのづから中絶するところはただ二つの合一が不可能となつた時のみである。

かうして私は史家を導くべき理念を明らかにするところまで來たと思ふ、我々は今一度史家と藝術家の間に右に立てた比較に歸つて見たい。藝術家に取つて自然の智識と有機的構造の研究は、史家に取つては行動し嚮導しつつ人生にあらはれる諸力の究明であり、藝術家に取つては靜かにしかも壯大に世界の事件の連關の中に展開しつつしかもかかる事件とはおのづから別個であるところの理念である。史家の任務をその極限的の、しかし最も單純な解式において示せば、現實の中に自己の現存在を求める一個の理念の努力を叙述する事である。私がここに理念の努力といふのは、理念にもこの試みが一回に成功するものとは限られてをらないのみならず、抵抗する素材を純粋に統御する事能はずして轉落し去る理念も亦稀ではないからのである。

私がこの議論をなしつつ堅持しようと努めて來たのは要するに二つの事柄である、第一に、生起するすべての中に一個の直接的に認識し得ない理念が支配すること、及び第二に、しかしこの理念は單に事件そのものに卽してのみ認識し得られる事に外ならない。故に史家は、すべてを物質的素材の中に求めるのあまり理念の統治を彼の叙述から除外するやうなことがあつてはならない。少くとも理念の作用する餘地を殘して置かなければならぬのみならず更にその心情を理念の作用に對して敏感に保ち、これを推知しこれを認識するだけの活潑さを有してゐなければならない。しかし彼は何よりも先づ、現實に對して彼自身の獨斷的な理念を持込み、或はひたすら全體者との連關のみを研究して『豐富なる個物』を無視するが如きことは愼まなければならない。彼の眼の自由性と纖細性を充分自分の性質の一部とし、如何なる事件の觀察に際しても常にこの二つを失つてはならない。何となれば如何なる個々の事件も一般的連關をはなれて生起するものはなく、生起するものには何れも上に述べた如く直接的な認識の圏外にある部分が含まれてゐるからである。もし史家にしてこの眼の自由がなければ、彼の見る事件はその廣さと深さにおいて見られたものではない、史家にして寛容な纖細さを缺くとき、彼は事件の單純にして生命ある眞理を敗つてゐるのである。